

「理性の進化」をめぐる方法論的問題

網谷 祐一 (Yuichi Amitani)

東京農業大学

拙著『理性の起源』（河出書房新社）では、われわれのもつ理性の進化について議論した。ここではおもに拙著で論じなかった二つの事柄について考える。一つは「理性の進化」を考えるときの方法論的問題であり、もう一つは、最近盛んに議論される、理性の進化を社会的能力の点から考える傾向についてである。

第一の問題は多岐にわたる。まずそもそも人間の心の進化について有意義なことが判明できるのかという懐疑がある。これはルウォンティンの議論が有名だが、それ以外でも進化心理学への批判の一つとして提出されてきた。

また理性の進化に絞っても問題がある。一つは「理性」ということで何を対象にするのかということである。これは「理性」には類義語がたくさんある（「合理性」、「知能」、「意識」、「批判的思考」など）ということだけでなく、「理性（的）」という語が使われる文脈も多岐にわたるという問題がある。例えば最近の心理学・哲学の文脈に限っても「論理・確率法則を正しく使える（論理的に思考できる）」「正しい知識を得て、それを適切に使用する」「証拠などを批判的に吟味できる」といったことが「理性的」と称される。その他の哲学に目を向けるともっと多様な用法がある。

また「理性の進化」を題材にするときには、人間の卓越性（他の動物と異なる部分）のどの部分を説明の対象にするのかという問題もある。例えば、文明の成果そのものを説明対象にするのか、それを可能にした能力について説明するのかといったことである。

第二の点は、社会的能力と理性の進化の関わりである。最近の人間の進化の研究は、人間の卓越性の源として社会的能力を挙げることが多い。しかし拙著ではこうした動向には一部を除いて触れなかった。それは私が社会的能力と理性の結びつきに一定程度懐疑的なためであるが、発表ではこう考える理由について述べる。